

白川研究 夙便り



立命館土曜講座公開講演会の様子
(2011年6月11日立命館大学衣笠キャンパス以学館1号ホール)

目次 ◆ index

中島敦の文学と白川静先生と(その三)	木村 一信	2
立命館土曜講座特集 「白川静の世界」と内田樹氏の公開講演	芳村 弘道	4
学生諸君との『詩経国風』の勉強会の報告他	高島 敏夫	6
二〇一一年度「漢字教育士資格認定講座」の実施について		7
第五回立命館白川静記念東洋文字文化賞の 選考結果について		9
災害復興支援事業「漢字で元気に」報告	久保 裕之	10
二〇一一年度活動報告		11
編集後記	芳村 弘道	16

第7号
発行
12.7.7

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-466-3470
Mail toyomiji@st.ritsumei.ac.jp
URL http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/
k-rsc/sio/index.html

中島敦の文学と白川静先生と(その三)

立命館大学特別招聘教授
フール学院大学学長

木村 一信

夏目漱石は、松山中学校の教員を辞し、熊本の第五高等学校に、やはり英語教員として赴任した一八九六年(明治二十九年)、『龍南会雑誌』に、「人生」と題したエッセイを発表した。その文章の末尾に、「不測の変外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出で来る、(中略)海嘯と震災は、^た嘗に三陸と濃尾に起るのみにあらず……」と記した。昨年の三月一日以降、この漱石の「人生」は、時折、引用されることが多くなつたが、「海嘯」すなわち、つなみは、一八九六年六月に三陸海岸を襲い、二万七千人余りの命を奪つた大災害を指す。また、「震災」は、それより五年前に濃尾地方を襲つたマグニチュード八・〇といわれる大地震を指し、この折は、七千人余りの人命が奪われている。

漱石は、四、五年の間に相ついで我が国を襲つた大災害についての記述を残したことになるのだが、この「人生」なる一文の主意は、ある時、突然として人間を襲う「狂気」について述べるところにある。漱石は、次のような言い方をしている。

……因果の大法を蔑^{ないがしろ}にし、自己の意思を離れ、卒然として起り、
驀^{ばくち}地に来るものを謂ふ、世俗之を名づけて狂気と呼ぶ……

海嘯や地震などの天災は、「人意の如何ともすべからざるもの」であるが、人たるもの、ある日突然に見舞われる「狂気」も同様なのだ、と

この時はまだ夏目金之助であった若き漱石は、その恐れについて語っている。この人間観、あるいは「狂気」観は、漱石文学の底流にある独自のものであり、その文学的テーマを形作る重要なファクターでもあった。「^{けん}呑なる哉」という言葉でもつてこの短文を結んでいる漱石にとつて、「狂気」とは、多くの人命を一瞬にして奪う大災害にも比すべき恐怖であった。しかも、それは自らの心のうちに潜んでいて、いついかなる時に顔を出してくるのかわからないものであったのだ。

漱石の「狂気」についての考え方にこだわったのは、白川静先生の『文字遊心』に収められた「狂字論」からの連想によつている。「狂気」の精神的な意味について、古代中国から説き起こし、我が国の万葉時代へと叙述する「狂字論」は、白川先生の数ある文章の中でもキラリと光る合口のように、一読するや心のうちに冷やりとした鋭さの残る論考と言えよう。

本来疎外を意味する語である「狂気」は、「闇を通して微光がもたらされるように、人はこの異質なるものを内在させることによつて、はじめて理性的であることができるのではないか。すなわちその異質なるものの自己疎外を通じて、より理性的であることができるのではないかと思ふ」と述べ、白川先生は、「狂気こそが理性と創造の源泉であり、狂気の歴史は、その民族の創造的な活力の消長を示すものであった」と続けていいる。

古代人にとつて「狂」とは、「憑^よきものなす」ところであり、「狂乱」の背後に、「識られざる神の力、ある邪悪なるものはたらき」を感じとつたりもしたという。

「狂」について最初の発言をした人は孔子であつたとし、孔子の「聖と狂とが一つの円環の上にある」さまを詳述し、『論語』にいう「狂者は進みて取る」という言葉、「憤を発する」との言葉のもつ「自己衝迫」のすさまじさを剔抉^{てつげつ}するところなど、白川先生の面目躍如たる感がある。

また、『史記』執筆の半ばにして、李陵を弁護して宮刑という「男子として最下の刑の屈辱」を味わうことになった司馬遷に言及するや、この「狂」への白川先生の思いは、自らのそれとも受けとれかねない熱さを帯びてくる。『史記』は、遷の生前には発表されず、『景帝本紀』をみた武帝が怒ってこれを削り、『武帝本紀』も早く失われたのは、遷の「狂惑のうちに、この書を残した」といわれる「憤怒」の激しさ、武帝の愚行を鋭く衝く遷の言の厳しさゆえなのだ捉える。よく知られた『呂后本紀』の「残虐無道」「凄惨」な呂太后の行爲を、遷は「事実を直書し、いささかも忌憚すること」なく記したことも、『史記』が「狂惑の書」であることを証するものであると白川先生は述べていく。

このように「狂字論」を貫く主張を辿つてくると、不思議なほど中島敦文学の素材やテーマに近接していることを感じざるをえないのである。よく知られているように、中島の文壇デビュー作は、「山月記」と「文字禍」であった（一九四二年二月、『文学界』）。もともとこの二篇は、『古譚』と総題の付された四篇から成るもので、他に、「狐憑」「木乃伊」とがあった。この四篇については、たとえば「言葉・文字」をめぐって展開される「異常」「不可測」の世界、といった評辞（佐々木充）が一般的であった。が、「異常」「不可測」というより、「狂」といった言葉でもって四篇を貫いている共通項を捉える方が、その内容から言つて適切と思われる。

憑きものが見ついた若い男の語る話に熱中する太古の未開人部落の人々（「狐憑」）。文字の霊の存在に気づき、その正体をきわめようとして粘土板の書籍の下敷きになって圧死する老博士（「文字禍」）、エジプト侵攻に加わった一人の武将が、敵の墓所をあばき、対面したミイラにかつての自らを見出して「狂」ってしまう話（「木乃伊」）、そして、残りの一篇「山月記」は、詩人として名を後世に遺したいと熱望した李徴が、「ついに発狂」して虎に変身する話である。いずれも、何かにとり憑か

れ、「発狂」の状態になり、ついには身を滅ぼしていく物語なのである。さらにまた、『古俗』と総題の付された「牛人」と「盈虚」のいずれも古代中国の書物に典拠を得た、おどろおどろしき物語である。まさに、「狂気」の世界の域に立ち入ったストーリーが展開されている。

こうした物語を紡いだ中島について、武田泰淳は、そのすぐれた「中島敦の狼疾について」という文章でもって次のように述べている。

中島敦を魅惑したものは何物であつたらうか。

たとえばそれは、子が父を憎むこと、父が子を恐れること。はては子がその父を殺すことなどであつた。これは暗い、ありうべからざるほど暗い事実だ。人間があればほどたいせつに守っているもの、その中に身を置いて安心し、そこにとじこもつて世間をながめられる堡壘のような倫理道德を、その石垣の一つ一つ、その煉瓦の一片ずつを蝕み、ゆるませ、ホロホロと剥落せしむる事実である。

ここで、武田は、古代中国やアッシリアなどの文献に着目し、現前化させた物語のもつ、人間の想像を超える「暗い事実」、すなわち「狂的」な事実を描いた中島に、讚嘆と驚きの言葉を呈しているのである。「生き恥をさらした男」と司馬遷を表現した武田は、中島の描出する「狂」の世界に共感を寄せている。そして、白川先生は、こうした中島敦の物語世界、武田泰淳の批評を視野に入れつつ、「狂」なるものの本質とその力とを、精神的に見事に論じているのである。それが、「狂字論」という漱石や中島や武田等の文学を解明するのに大きな一助となる、すぐれた評論のもつ意義であるだろう。

ここで紙幅が尽きた。以下、続稿に期したい。

「追記」 前回の拙稿と、いささか重なる箇所のあることをお断りしておきたい。

立命館土曜講座特集

「白川静の世界」と内田樹氏の公開講演

副所長 芳村 弘道

立命館土曜講座は、広く一般市民の方々を対象にした大学の公開講座として六十年以上も継続し、地域と大学を結ぶ場として毎回、好評を得ている。二〇一一年の五月・六月（第二九七五回〜第二九八一回）は、当白川静記念東洋文字文化研究所が企画担当し、「白川静の世界」と題する連続講座を催した。白川静先生の学問をさまざまな角度から解説し、「白川学」の世界に親しみやすく理解していただくという主旨のもと、学外からの講師も招いて七回の講演と特別企画の映画「京都太秦物語」上映を開催した。また六月十一日には内田樹氏による公開講演も行なった。内田氏の講演の内容については後に記すこととし、先にその他の各講師が事前に示された概要に基づき、それぞれの講演のあらましを紹介し、立命館土曜講座の特集「白川静の世界」の報告としたい。

◆「白川静の人と学問と生涯と」（五月七日）

芳村 弘道（本学文学部教授）

学問に捧げられた白川静先生九十六歳の御生涯は、三つの時期に分けられる。第一期は三十七歳（昭和二十二年）までの学問基盤を作られた時代、第二期は三十八歳で初めて論文を公刊されて以降の専門研究時代、第三期は六十歳以降に御研究成果を一般社会に向けても発信された時代。この講演では、主として第一期の時代に影響を受けられた書籍や学者・学派を紹介し、白川先生の学問形成の過程をたどった。

◆「白川静の中国文学論」（五月十四日）

萩原 正樹（本学文学部教授）

白川静先生の中国古代文学研究も広範な領域に及ぶが、特に『詩経』研究と古詩成立に関する研究に焦点を当て、独自性が解説された。『詩経』の訳は学問の厳密性に裏付けられているが、その訳詩は高い文学性を備えている。それは先生の短歌制作と関連していると思われる。

◆映画「京都太秦物語」上映・解説（五月二十一日）

富田 美香（本学映像学部准教授）

本学と松竹株式会社が提携し、本学映像学部客員教授の山田洋次監督の直接指導を受け、映像学部の学生がシナリオ作りから撮影まで手がけて完成させた映画「京都太秦物語」を特別上映し、製作に携わられた富田准教授に本作の特色について解説を願った。この映画には「白川文字学」を研究する若手研究者が重要な役割を占めている。この登場人物が設定されるに至った過程などが紹介された。

◆「白川文字学」（五月二十八日）

津崎 幸博（漢字教育工学会理事）

漢字成立の当初の形を示す甲骨文・金文を研究し、漢字の形と意味との関係を明らかにして組織した文字学の体系が「白川文字学」といえる。また、その文字学に基づいて、思想・歴史・民俗など広範囲に及ぶ古代学が展開された。「白川文字学」の形成を「U（さい）」の解釈を例にして述べ、また字書三部作『字統』『字訓』『字通』の編集協力者として知り得た逸話の紹介もなされた。

◆「白川静と民俗学と」（六月四日）

大川 俊隆（大阪産業大学教養部教授）

儒教の經典の一つとされてきた『詩経』を民俗学的視点から研究し、またわが国の記紀歌謡や『万葉集』との比較研究も行い、独自の成果を示されたことを白川静先生『詩経研究通論篇』『興の研究』、中公新書『詩経』などをもとにして解説が行われた。

◆「白川静の『孔子伝』」(六月十八日)

佐藤 一好 (大阪教育大学教育学部教授)

白川静先生は『孔子伝』によって刺激的な孔子像を世に問われたが、少し難解などころがあるように思われる。先生が示される孔子像の一端に迫った。

◆「白川静の漢字教育」(六月二十五日)

矢羽野 隆男 (四天王寺大学人文社会学部教授)

白川静先生は最晩年に漢字教育への篤い思いをもっておられた。「系統的に学べば楽しく効率もよい」との考えから構想を示された。ただし御自身は実践に及ばれないとまがなかったようであるが、その遺志は協力者によって実践に移され、教材も開発されている。白川先生の漢字教育構想を解説し、また福井県における実践が紹介された。

内田樹氏の公開講演 「私が白川先生から学んだこと」

六月十一日には立命館土曜講座の特集「白川静の世界」の特別企画として、神戸女学院大学名誉教授の内田樹氏を講師に招いての公開講演会が衣笠キャンパス以学館一号ホールにて開催された。第一部は内田氏の「私が白川先生から学んだこと」と題する講演、また第二部には内田氏と当研究所所長の加地伸行教授とによるトークセッションが行われた。

第一部「私が白川先生から学んだこと」



公演を行う内田樹氏

の講演において内田氏は、第一に白川静先生の文体の魅力を取りあげられた。圧倒的な知に支えられた断言的な表現が先生の文章の一特色になっている。また深い学問的な考察から生まれたただでなく、経験に裏打ちされた生活者としての個性の意見がそこに加わり、渾然一体化し

たバランスのとれた文体となっており、人を惹き付けてやまないところがあると評された。第二には、白川先生の学問には「祖述」という要素が重要な位置を占めていることを指摘された。第三には、「呪術」「呪能」が古代のみならず、現代においても機能しており、現代社会は古代社会と通底するという白川先生の所説のもつ意義に言及された。「呪能」の存在を示された先生の思想は現代社会を考える上にも大いなる示唆となる。この点においても先生の学問は常に今日性を豊かにもつものであると述べられた。

第一部終了後に聴講者の質問用紙が回収され、第二部はそれに答える形式を交えた加地所長との対談によって進行した。内田氏はフランス現代思想の専門家として令名高いが、また御専門の領域に止まらず各方面の評論活動も活発に行い多くの愛読者を得ておられ、さらには合気道の達人としても知られている。幅広い質問に対しユーモアに富んだ応答を行われ、満員の会場は楽しい雰囲気にも包まれ、公開講演は終了となった。

一般に知られている白川先生のご業績は、漢字研究の方面に偏っている嫌いがある。今回、二箇月にわたる土曜講座「白川静の世界」を開催し、市民の方々に白川先生の学問の広さと深さを知っていただき、また「白川学」がもつ現代的な意義についても理解を深めていただくよき機会となったことを喜びたい。毎回、百名以上もの聴講者が参加され、熱心に聴講して下さったことを改めて感謝申し上げる。



公開講演会は多数の来場者を集めた

学生諸君との『詩経国風』の 勉強会の報告他

客員研究員 高島 敏夫

白川文字学を学びたいと考えている学生は毎年いますが、なかなか自分で勉強を進めにくいようなので、その手助けになれるようにと毎年勉強会を開いてきました。一昨年は白川静『漢字の世界』（平凡社・東洋文庫）をテキストに使ったのですが、予想外に難しかったようで、最初は意欲的だった学生の中にも挫折する者が出て来ました。白川先生の文体が難しいと言う者もいました。それに今は使わなくなった言葉がたくさん出てくるので、文章が読みづらいという声もあつて、学生たちがどこで躓くのかを多少知ることができたような気がします。こんな具合ですから『字統』を読めるようになるまでにはなお長い道があります。とはいえ、白川先生の文章を読まずして白川文字学の理解を深めることはありえません。それには何よりも白川先生の文章あるいは文体に慣れる必要があります。「習うよりも慣れよ」の考え方です。そう考えて今度は、『詩経国風』を読むことにしたのです。特に恋愛詩なら馴染みやすいだろうから、興味も湧いてくるに違いない、という秘かな期待をもっていました。

白川文字学とはいうものの、翻って考えると、先生はもともと詩経研究のために必要だったから文字学の研究を始めたわけで、それとことん追究しているうちにいつの間にか文字学の体系を築くまでになつたということ。そう考えれば、『詩経』を読むことから始めるのは最もいいやり方ではないかと思いました。

『詩経』は「国風」の「周南」から始まりますが、恋愛詩が比較的多

く集まっているのは「陳風」と「鄭風」ですので、「陳風」から読み始めました。勉強の仕方としては、平凡社の東洋文庫に入っている白川静『詩経国風』の注にもっと詳しく書き加えるという方法、そしてその過程で気付いたことを話題に出してもらう、というやり方で始めました。

そしてその作業に次第に慣れて来るあたりから、もう一つ発展的な方法を求めました。それは『詩経』特有の表現法である隠語や隠喩に注目するという点ですが、今対象としている作品にとどまらず、そのような表現をしている作品を全部調べ上げるといふ作業を求めました。これは『詩経』の詩篇全部に当たっていくわけですから、かなり手間がかかりますが、調べれば何かが分かりますから、意欲を掻き立ててくれます。こうして学生諸君は詩篇の表現の特徴に次第に慣れていきました。

実はもう一つ習熟してほしいと思っていたことがあります。それは語彙の調査と分析です。これは白川先生の勉強の仕方の真骨頂とも言うべきもので、一種の訓詁学に通じる道です。しかし語彙の調査と分析と一言で言っても、実際にやってみないとどんなふうにするものなのか、分析してどういう風にするものなのか、実感が湧かないものです。それで勉強会の当初から私がさりげなく補足するような形で進めていきました。この語はこれこれの作品にこんな風に使われているといったやり方です。そうしているうちに、学生諸君も要領が分かってくるかと見えて、今度は自分で調べてくるようになりました。こうした作業を通じていつの間にか、白川静のやり方を体得していつてくれるものと期待をもつて見えています。

昨年の十一月二十日（日）に同志社大学大学院文学研究科主催の国際シンポジウムが行われました。「文字の宇宙——かたちの意味、意味のかたち——」という興味深いテーマです。私も白川文字学の立場から『祭礼言語の記録・甲骨文』の題目で講演をし、ディスカッションにも加わりました。

二〇一一年度

「漢字教育士資格認定講座」の実施について

漢字教育士の登場

五年前から検討し、昨年度から実施してきた漢字教育士資格認定講座が花開き、今年度から漢字教育士が登場する。

わが国におけるこれまでの漢字教育は、児童・生徒に対してひたすら努力をさせて漢字を覚えさせるといふ、精神主義的なものであった。そのため、児童・生徒はただやみくもに漢字を覚えることにエネルギーを費やしてきたのである。

そのようになってしまったのは、小学校教員はもとより、中学校・高等学校の国語科教員のほとんどが漢字について十分な教育を受けてこなかったからであろう。そのため「がんばれ」という精神論に陥ってしまふのは当然であろう。

そういう異常な教育を是正するために、漢字について体系的知識や教育方法を身につけた漢字教育士を教育界に送りこもうというのが本研究所の願いであり、その願いを荷う者こそ漢字教育士である。この漢字教育士が登場する今年度は、わが国の国語教育における革命的画期となるであろう。

(所長 加地 伸行)

実施概要報告

白川静記念東洋文字文化研究所は白川文字学をはじめとして体系的な漢字教育の普及と教育者の育成を行うことを目的とし、二〇一一年度「漢字教育資格士認定講座」を開講した。本講座は当研究所が定める所

定のカリキュラムを修了した者に対し漢字教育者として資格「漢字教育士」を認定するものである。

現在、立命館大学文学部、放送大学大阪学習センター、福井県教育委員会、財団法人日本漢字能力検定協会において開講されている。

二〇一一年度は立命館大学文学部から第一期生となる四名の「漢字教育士」が誕生した。受講生は該当の科目履修九〇時間に加え、二〇一二年二月に実施した二日間にわたる計八時間の漢字教育研修を集中的に受講し資格認定の要件を満たすこととなった。研修は履修科目において習得した漢字学・文字学に関する知識をどういった形で指導するのかという点について重点が置かれ講義がなされた。漢字教育の現状に関する講義にはじまり、実例をもととした小学生、中学生、高校生、社会人・一般とそれぞれ異なる受講者層を対象とした漢字指導の方法について研修が行われた。研修においては、一日四時間という長時間にわたる講義にも、講師の話に熱心に耳を傾け講座に集中する受講生の姿があった。

二〇一二年度も本講座は各開講機関において引き続き開講されている。本年度は立命館大学文学部以外にも資格取得要件を満たす受講生がでることが予想されており、多数の「漢字教育士」が認定されることが期待される。

白川静博士の出身地である福井県では、近年、県の政策として白川文字学の普及を掲げ、県内すべての公立小学校で白川文字学を活用した漢字学習を取り入れており、二〇一一年度より本講座が開設されることとなった。福井県教育委員会は、白川文字学および漢



財団法人日本漢字能力検定協会実施の講座の様子

字教育の指導方法を身につけた教員を養成することで、より質の高い授業の提供につながるという。講座には、県内の小学校の教員や生涯学習サークルの会員ら四三名が参加しており、長期休暇期間を中心に集中講義を行い、二年間での修了を予定している。

また、日本漢字能力検定協会においても同協会の実施する「漢字能力検定」一級・準一級の合格者の中から受講を認められた一二名が立命館大学大阪キャンパス及び東京キャンパスにおいて受講しており、二〇一三年三月の修了を予定している。

放送大学大阪学習センターにおいても、すでに開講されている該当科目を修了し要件を満たした受講生が出てきており、二〇一二年度内に研修の実施を予定している。

その一方、受講者の対象は各機関によってそれぞれ限定されており、受講を希望されていても、制度上受講対象とならない方、受講時間の確保が難しい方、遠隔地の方などお問い合わせ頂いても、残念ながらお断りをせざるを得ない状況である。現在、研究所としてもこの多様なニーズに合わせ、インターネットによる開講をはじめとして様々な形での講座展開の可能性を検討しているところである。

本講座が、より多くの方に受講頂ける制度として確立され、漢字教育の普及と教育者育成の一助となるよう今後も継続的な展開を図っていく。

● 受講者の声

立命館大学文学研究科 布谷 達朗

私は中国文学を学ぶため、立命館大学に入学した。そしてこの四月より、大学院への進学と同時に「漢字教育士」の資格を得る機会に恵まれたのである。「漢字教育士」のカリキュラムは漢字学

と漢字教育研修があり、漢字学を学ぶ私としては有意義なものであった。研修では映像を通じて、子供たちの漢字に対する興味関心を肌で感じることが出来、あらためて漢字教育の重要性を受け止めたのである。私自身、小学生時代の国語の授業を思い起こすと、暗記中心の漢字の書き取りテストが苦手な少年であった。漢字に興味を持つきっかけとなったのは、書道を習い始めたことからである。書道の作品を書く際に、白川静先生の「常用字解」や「字統」を参考にし、体系的に書かれた白川先生の著書は、漢字の成り立ちや意味が解りやすく書かれており、漢字の面白さに魅かれ、時空を超えた先人の精神世界に思いをめぐらせたのである。

現在ほど漢字に興味を持たれる時代はないと思われる。誕生した子どもたちの名前が多様化にあるように、親は辞書を片手に漢字の成り立ちを調べ、名前を考え、また手書きの良さも再認識されるようになっていく。人々は先人が残した漢字の大切さに気づき始めているのではないか。私たちは、人が漢字に関心を持ち、知りたいと思つていくことを学べる機会を作り、自らの力で気づく力をつけるよう助言し、「なるほど、そうだったのか」と「目から鱗」を発見する楽しさを感じてもらえるように努力したい。

漢字は古人の言霊を感じることに由来の大切な文化である。古人が私たちに訴えかける源は何であるのか、私も学びながら漢字文化を次世代に伝えられればと思つている。白川文字学は子供から大人まで段階的に学べる学問である。コツコツとした道ではあるが、学ぶことの心地良い風を感じて頂ける漢字教育士を目指したい。白川先生の「逆風に向かって翔べ」という言葉を胸に抱いて入学した私は、情熱を持ち続けることが人を動かす原動力になると信じている。白川静先生の門下生として恥じないよう、今後とも精進していく覚悟でいる。



第五回立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考結果について

立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞

森岡 隆 氏

(筑波大学大学院教授)

受賞理由

多年にわたる書道史研究による、文字や書法についての豊かな学識に基づき、日本における出土木簡の文に、左から右へ、すなわち左書きがあることを実証し、それは二幅対・三幅対のシンメトリーにもつながると推論されました。そして、そのシンメトリーの発想や思考は、甲骨文や金文にまで遡れるのではないかとし、日本古代の出土資料に対する独自の解明を中心とする漢字文化の研究に關するすぐれた業績を高く評価しました。

受賞者の声



考古学の成果を援用しつつ、難波津の歌を記した木簡・土器や七世紀後半に遡る万葉歌最古の遺例(明日香村・石神遺跡出土刻書木簡)を発見解読し、当時の一字一音表記の普通通行を検証することができましたが、仮名にもかわることが東洋文字の一環として認められましたことに深謝いたします。今後、本賞の対象がより学際的になることでしょうが、書学書道史領域にとりましても励みになることと存じます。ありがとうございました。

立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞

書論研究会 (代表 杉村 邦彦 氏)
京都教育大学名誉教授

受賞理由

京都教育大学名誉教授、杉村邦彦会長を中心に、学術機関誌『書論』の刊行を通じて、書論や書に関する諸文献の研究を着実に行ない、その成果は中国・台湾・韓国等においても極めて高い評価を得ました。その多年にわたる、書を通じての漢字文化の普及に努めたすぐれた業績を、ここに大いに顕彰しました。

受賞者の声



白川先生とは、先生が文字文化研究所所長御在任中、私も理事の末席を汚し、御指導と御交誼を賜って参りました。中でも、平成九年八月同研究所と遼寧省博物館との共催で遼寧省瀋陽市において「日中合同文字文化研討会」が開催されましたときは、私も団長白川先生の随伴として参加し、羅振玉に関する研究発表をして、旅順の羅振玉故居も参観できましたことは、忘れがたい思い出です。先生からは私のさまざまな書学研究と私の編集します『書論』誌について、過分のお言葉を賜っておりました。先生の御期待にそうのは困難ですが、今後も斯学のために研鑽と努力を積み重ねて参りたいと期しております。

選考委員

委員長 加地伸行
委員 上野隆三・下中美都・芳村弘道(五十音順)

災害復興支援 「漢字で元気に」 活動報告

文化事業担当 久保 裕之

二〇一一年三月に発生した東日本大震災は、教育・家庭生活にも大きな影響を及ぼしている。当研究所では、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆の力を震災復興に向けてるように、「漢字で元気に」をテーマとして、さまざまな話題や知識を提供する活動を行うとする試みを始めた。なお、この活動は学校法人立命館東日本大震災関連特別検討プロジェクト・災害復興支援



子供たちの活発な声が響く「漢字クイズ大会」

援室が教職員向けに公募した「東日本大震災 復興のための『私たちの提案』」事業に採択されたものである。

まず同年九月二三日・二四日に、福島市の子どもの夢を育む施設「こむこむ」で「福島漢字探検隊―漢字あそび大会」を開催した。当研究所は、福島大学人間発達文化学類 澁澤尚研究室と共同で、本プロジェクト第一弾とした

同イベントを開催し、市民を無料招待した。漢字・日本語をテーマにしたゲーム（かるた・トランプ・双六など）や漢字グッズの当たるクイズ大会・画数ビンゴ大会、古代文字で名前を書く等の催しや、白川静博士の紹介、学習用教材の展示などを行った。

「震災・放射能の影響でたくさんのお友達が一時的に福島を離れました。精神的にも子どもたちの負担が大きい中、あそびながら漢字に親しむという、学びの楽しさに触れることができ、ありがたく思います」という感想もあった。会場には二日間で約二〇〇人が来場した。地元紙の『福島民報』『福島民友』の取材も受け、同県在住の校友も多数来訪し、家族や友人同士でゲームやイベントを楽しむ声が続日響いていた。

また、同月二六日・二七日には宮城県角田市を訪問した。同市は「東京漢字探検隊」が毎年春に訪問し「農業と宇宙」をテーマに体験学習をしていた先であるが、今回は行くことができなかった。二六日は、市立枝野小学校を訪問し、漢字の授業を行った。同校の宍戸真一郎校長は、同年三月まで地震と津波で甚大な被害を受けた同県南三陸町立伊里前小学校の校長として勤務されていた。枝野小と伊里前小とが校長の異動を機に交流を行なっている話を聞き、枝野小だけでなく、伊里前小と同校に間借りしている同町立名足小へも白川文字学教材（出版各社からの協賛品）等一式を贈呈することとした。その後、角田市の教育委員会を訪問して菊池俊彦教育長に面会し、教育委員会および今回は



スタッフとして参加の福島大学学生



「大」の字を体感する児童（角田市立横倉小学校）



「漢字あそび大会」（福島）会場全景

訪問できなかった他の小学校七校分の教材を教育長に贈呈した。

翌二七日は、同市立横倉小学校を訪問し、ここでも授業を行い、授業の後、教材一式を贈呈した。同校の太田一江校長は角田市の隣町であり甚大な被害を受けた山元町に在住されており、津波が自宅敷地のすぐ前まで来たという。「山元町の小学校にも来ていただけますか」と依頼を受けた。

今年も一〇月に同様の取組を福島市と角田市で行なう計画を進めている。また立命館大学が災害復興に向けた連携協力に関する協定を締結した岩手県大船渡市をはじめ、当研究所としてできる限りの支援活動を継続して行なっていきたいと考えている。

文化事業

二〇一一年度 活動報告

文化事業では、研究所設立の七年目にあたる二〇一一年度には、前年度に引き続き、白川文字学の一般への普及と、ネットワーク作りに重点を置いて、以下の活動を展開した。

体験型漢字講座「漢字探検隊」

二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのをテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとになった自然や文化を学習する体験型の講座である。二〇一一年度は全国八都府県で二〇回開催され、延べ約一五〇〇名の参加者があった。

本年度は新たな開催地として、滋賀県草津市・茨城県つくば市・福岡県久留米市・福島市が加わった（福島市での事業については別項に）。新たな取組としては、福井県永平寺町シルバーセンターの依頼によるオンラインイベント「漢字探検隊」が開催された。二〇一一年七月には同センターが募集した団体が京都を訪れ、二〇一二年三月には福井県内での講座開

福島	福井	福岡				広島	茨城		東京		滋賀		京 都					地域		
1	番外	7	6	5	4	3	2	1	14	13	2	1	番外	30	29	28	27	26	25	回
2011・9	2012・3	2011・9	2011・9	2011・9	2011・9	2011・5	2011・10	2011・9	2011・10	2011・7	2011・11	2011・10	2011・7	2012・3	2012・2	2011・12	2011・10	2011・7	2011・5	実施年月
—	動物・水棲動物	動物	神	動物	科学	動物	植物	人体	動物	建物・道具	植物	人体	動物・神	—	医療	神	植物	道具	動物	テーマ
漢字あそび大会	漢字探検隊	動物園で漢字と出会う	神とつながる漢字	鳥類・動物と漢字	漢字に見る科学の眼	動物園で漢字と出会う	植物園で漢字と出会う	漢字ジェスチャー大会	動物園で漢字と出会う	江戸で漢字と出会う	植物園で漢字と出会う	漢字ジェスチャー大会	漢字探検隊	漢字あそび大会	医療・健康と漢字	神とつながる漢字	植物園で漢字と出会う	匠もびっくり漢字の技	動物園で漢字と出会う	講座名
200	50	35	27	41	60	16	36	42	15	20	15	79	60	400	48	85	65	76	77	参加者数
こむこむ館	足羽山公園遊園地・越前松島水族館	到津の森公園	太宰府天満宮	久留米市鳥類センター	福岡県青少年科学館	広島市安佐動物公園	筑波実験植物園	つくばサイエンスインフォメーションセンター	恩賜上野動物園	江戸東京博物館	草津市立水生植物園	立命館大学びわこ・くさつキャンパス	京都市動物園・北野天満宮	立命館大学朱雀キャンパス	眼科・外科医療博物館	北野天満宮	京都府立植物園	京都市伝統産業ふれあい館	京都市動物園	場所

催となった。

また同月開催された「第三〇回記念京都漢字探検隊―漢字あそび大会」では、近隣の三条会商店街の協力を得て「漢字ラリー」を開催した。「珈琲」「眼鏡拭」など漢字で書かれた商品の札を正しく読めるとスタンプがもらえるもので、参加者は商店街の方々と触れ合いながら、買い物を楽しんでいた。



漢字ラリーで「靴履」の読みを答えてスタンプをもらう
(京都 三条会商店街 2012年3月)



アカデミック京都ウォッチング
(京都 月桂冠大倉記念館 2011年11月)

学内他組織との連携事業

二〇一一年一〇月下旬から一月初旬の一週間には、国際平和ミュージアムとの連携で、恒例の平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和つてなに色 文字・活字文化の日特別企画」を開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。

また同年一月には、立命館大学父母教育後援会が主催する学生保護

者向けの京都文化学習ツアーである「アカデミック京都ウォッチング」に「白川文字学―漢字で巡る京都」と題したコースを開設、異なった視点での京都観光・学習として好評を得た。

二〇一二年度にも継続して開催するほか、八月には教員免許状更新講習に「漢字をどう教えるか」を開講する予定である。

他の機関との連携

財団法人日本漢字能力検定協会とは「漢字教育士」養成講座事業の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の活動広報や情報交換等の交流が始まった。またコープこうべ生活文化センターでは「子ども漢字塾」および「大人の漢字塾」講座を、神戸新聞文化センターでは「白川静の世界―漢字を楽しもう」を開講した。

福井県との連携

福井県の公立小学校全校で行われている「白川文字学」に基づく漢字教育は着実に成果を上げており、県教育委員会編集により県内の小学校教育で使用されていた副読本(参考書)『白川静博士の漢字の世界へ』は、二〇一一年二月に平凡社から全国発売され、二〇一二年四月には実売三万五千部を達成した。同じく使用されている副読本(ワークブック)『白川静博士に学ぶ 楽しい漢字学習』も二〇一二年三月に全国発売された。

当研究所からは、この事業の中枢機関である福井県教育研究所に研究会講師として津崎幸博・研究所客員研究員を派遣するほか、県教育委員会主催の「白川文字学講座」「親子ふれあい漢字講座」へ出講した。また福井大学での夏季集中講座も開催された。県教育委員会からの委託事業である「漢字教育士」養成講座は、継続して長期休暇中に集中講義の

形で行なわれ、四〇名強の教員等が受講している。今年度末には福井での「漢字教育士」が誕生する見込みである。



福井県教育委員会「漢字教育士」養成講座の様子



「白川文字学―漢字で巡る京都」講演
(東京 京都造形芸術大学外苑キャンパス 2012年2月)

滋賀県草津市・兵庫県朝来市・京都市との連携

びわこ・くさつキャンパスを擁する立命館大学と草津市とは、すでに教育研究連携に関する協定を締結しているが、同市では基礎学力の定着と学習意欲の向上を図るため、二〇一〇年度より市立の全小・中学校にて漢字・計算・英語の三検定の受検に取り組むようになった。そのうち漢字教育を側面支援するため、草津市教育委員会との共催事業として「草津漢字探検隊」が始まったほか、市内の複数の施設において「白川静展」を開催し、好評を得た。二〇一二年度は、「漢字探検隊」の開催のほか、各学校への出張講義や教員に対する講習への出講などが企画されている。

また、兵庫県朝来市和田山公民館での市民講座が五月から一二月まで

連続開催され、一月には同市主催の「兵庫短歌祭」での講演を行なった。二〇一二年度も引き続き市民講座への出講があるほか、同市竹田城下での「漢字探検隊」の開催が計画されている。

京都市が二〇一二年二月に実施した京都創生PR事業「京あるき in 東京二〇一」の「京都の大学による特別講座」に協賛し、「白川文字学―漢字で巡る京都」を講演した。

白川文字学の普及者とのネットワーク構築

全国で白川文字学の普及に努力されている教員や漢字研究者とのネットワーク作りは四年目を迎え、ネットワーク相互間での連携が行われるようになった。

学力の基礎をきたえどの子も伸ばす研究会（学力研：小学校教員を中心とした自主学習組織。ここでの実践から「百マス計算」などが生まれた）二〇一一年八月の全国大会での発表を行った。

出張講座：草津市立草津第二小学校・京都府立洛陽工業高等学校・追手門学院高等学校（大阪府茨木市）への出前授業および教職員への講習会に招かれた。

伊東信夫氏（漢字研究家。『漢字が楽しくなるシリーズ』（太郎次郎社エディタス刊）や『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界シリーズ』（スリーエーネットワーク刊）の著者）を「京都漢字探検隊―漢字あそび大会」に招き、講演などを行った。また小寺誠氏（客員研究員・元京都府教員・『白川静式小学校漢字字典』（フォーラム・A刊）著者）を研究所客員研究員とし、カルチャーセンター等への出講を行なっている。

近年「白川文字学」関連の書籍を刊行している出版社（平凡社、太郎

次郎社エディタス、スリーエーネットワーク、方丈堂出版）との間で、講座での広告配布や「漢字あそび大会」での景品提供など相互連携がなされている。



福井漢字探検隊
（福井 越前松島水族館 2012年3月）



植物園で漢字と出会う
（茨城 筑波実験植物園 2011年10月）



漢字に見る科学の眼
（福岡県青少年科学館 2011年9月）



漢字ジェスチャー大会
（立命館びわこ・くさつキャンパス 2011年10月）

学術事業

主な研究業績

○加地 伸行

著 書 沈黙の宗教―儒教(ちくま学芸文庫)(筑摩書房二〇一一年四月)

○芳村 弘道

論 文 『選詩演義』考異―宋代『文選』版本としての『選詩演義』―
〔學林〕第五三・五四号 二〇一一年二月
関于陸心源手校本『政経、心経』 董偉華訳(「中文学術前沿」
第三期 二〇一一年二月 浙江大学出版社)

編 著

立命館大学文学部中国文学専攻所蔵 村上哲見先生旧蔵詞学
文献目録(「中国芸文研究会」二〇一一年一月)
立命館大学中国文学専攻所蔵 故黃萬居氏寄贈漢籍古書分類
目録(二〇一二年三月)

南丹市立博物館所蔵 小出文庫漢籍古書分類目録(南丹市立
博物館、二〇一二年三月)

訳 注

董康『書舶庸譚』九卷本譯注(四)(立命館白川靜記念東洋
文字文化研究紀要)五号 二〇一一年六月)

学会発表

『選詩演義』考異―『選詩演義』所用『文選』の版本問題
『文選』與中國文學傳統國際學術研討會 南京大学
二〇一一年八月)

その他

納税者であった白居易(「新釈漢文大系季報」一一一卷
二〇一一年六月)

○上野 隆三

講 演 「表と裏の三国志 ―『三国志演義』成立と花関索―」
立命館土曜講座第二九九四回(二〇一一年一〇月八日)

○萩原 正樹

論 文 蕪城秋雪及其『香草墨縁』(「詞学」二六号 二〇一一年
二月)
森川竹磳年譜稿(上)(「學林」五三・五四号 二〇一一年
二月)

編 著

立命館大学文学部中国文学専攻所蔵 村上哲見先生旧蔵詞学
文献目録(「中国芸文研究会」二〇一一年一月)

翻 訳

関中金鸞校訂本『詩余図譜』考 張仲謀、萩原正樹訳(「風絮」
八号二〇一二年三月)

○松本 保宣

論 文 「从朝堂至宮門―唐代直講方式之變遷―」松本保宣 鄧小
南・曹家齊・平田茂樹主編『文书・政令・信息沟通―以唐
宋時期为主―』上册(北京大学出版社 二〇一二年一月)

研究発表

「隋唐皇帝の居所と宮城構造の變容」(東アジア比較都城史
研究会第三回共同研究会 二〇一二年一月七日 山口大学
人文学部)

○高島 敏夫

論 文 讀「釈師」―白川文字學の原點に還る(四)(立命館白川靜
記念東洋文字文化研究所紀要)五号二〇一一年六月)

編集後記

○木村一信先生には公私まことに御多用のところ、「中島敦の文学と白川静先生と」の続稿を寄せて下さった。今回は「狂気」を軸に夏目漱石から説き起こし、中島敦と白川先生の「狂字論」との近接性を指摘し、あわせて武田泰淳にも言及され、「狂字論」が夏目・中島・武田の文学を理解するにも参考になると説いておられます。

○当研究所は、昨年、二〇一一年の五月と六月の立命館大学土曜講座を企画担当し、「白川静の世界」という統一テーマのもと、学内外の講師による講演や特別企画の映画「京都太秦物語」の上映を行いました。

「京都太秦物語」は、松竹株式会社と本学映像学部が共同製作し、大いに話題となった映画です。重要な登場人物が「白川文字学」の研究者と設定されており、この映画鑑賞を通して「白川学」の広がりを理解して戴けたと思われます。上映前には映像学部の富田美香准教授にこの映画の製作過程を講演して戴きました（なお富田准教授には小誌第五号に「『京都太秦物語』製作談 白川文字学研究者 榎大地の創造」の御寄稿があります）。連続講演の一つには神戸女学院大学名誉教授の内田樹氏をお招きしての「私が白川先生から学んだこと」と題する公開講演を催し、多数の聴講者が得られました。二ヶ月、八回におよぶ立命館大学土曜講座「白川静の世界」の報告を小文にまとめました。

○高島敏夫客員研究員は毎年、学生対象の勉強会を開催されています。昨年から白川静先生の『詩経国風』（平凡社東洋文庫）をテキストにして、『詩経』の表現法や語彙を丹念に調べて読み進めていることを、「学生諸君との『詩経国風』の勉強会の報告他」に記しておられます。

白川静先生の学問方法が習得できる貴重な場を学生に提供されていることは、当研究所の学内活動として重要な位置を占めるものです。

○当研究所は「漢字教育士」という独自の資格認定を開始しましたが、二〇一一年度には「漢字教育士資格認定講座」を学内に行い、本学文学部からの受講生四名が第一期生として「漢字教育士」の資格を認定されました。この講座の内容などについての紹介および二〇一二年年度の予定などが、「二〇一一年度『漢字教育士資格認定講座』の実施について」の一文に記されています。また第一期生のひとりの本学大学院文学研究科博士前期課程一回生、布谷達朗君が受講の体験記「漢字教育士資格認定講座」を受講して」を書いてくれました。

○第五回立命館白川静記念東洋文字文化賞は、筑波大学大学院教授の森岡隆氏と書論研究会（代表・杉村邦彦氏）にそれぞれ「教育普及賞」を贈呈しました。「第五回立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考結果について」に、受賞理由と受賞者の声を掲載しました。なお贈呈式は二〇一一年五月二十一日に行われました。

○昨年三月十一日の東日本大震災は、今なお大きな影響を与えています。当研究所としましても、「漢字」を話題にした交流の場を設けることによる復興支援の活動を行っております。文化事業担当の久保裕之氏の尽力によって、この活動が続けられています。その活動報告を久保氏にまとめて戴きました。また久保氏には二〇一一年度のその他の文化事業の活動報告も記してもらいました。当研究所が広く社会に向け、「漢字」「東洋文字文化」を基軸に据えた文化活動を昨年度も展開したことを、二つの報告を通して御理解賜れば幸いです。

（芳村弘道記）